

## はじめに

新津でございます。よろしくお願いいたします。

このスライドからご覧いただきます。これが青木ヶ原でして、貞観6年(864)に噴火したわけですが、その様子はこうだっただろうというわけです。河口浅間神社の裏の高台から撮った写真に噴火の推定状況を加えてみました。これが天神山、こちらが長尾山、大室山も見えます。こんなふうに、どか〜んと噴火し溶岩が流れて、大隅先生のお話にもございましたように<sup>せ</sup>剱・本栖の両海を埋めて、河口の海に向かってくるという、まさにそういう状況を表しています。でも河口湖までは流れてきませんでした。だからこその近くに浅間明神の祠を建て、ここでお祈りをして、富士山の女神にこれ以上怒らないでくださいとお祭りをするには、ちょうど良い場所だなと。しかも河口の海という神聖な水がありますので、整合性がとれるのかなという感じがします。

私の今日の話ですが、溶岩の下からいろいろな土器が発見されております。それらが果たして溶岩が流れた時代と年代が合うのか合わないのか、馬場先生のお話とも関わってまいりますので、そのような話を進めていきたいと思っております。

## 1 貞観6～8年の噴火

まず、この一覧は『富士吉田市史』史料編2〔古代・中世〕をもとに作成した噴火の年表です。大隅先生や馬場先生からすでにお話がありましたとおり、歴史時代ではこういう噴火の記録が残っています。なかでも、本日の話題の中心は、貞観6年、西暦864年の噴火でございます。承平7年(937)については、ちょっと疑問だという話がありましたけれども、このあたりの剣丸尾だとか、周辺の檜丸尾、鷹丸尾のお話までしてみたいと考えているところです。

これはお手許にお配りしてある津屋先生作成の図です。富士山を中心に、溶岩が四方に流れている様子がわかります。本栖湖、精進湖、西湖とありますが、これが貞観6年

の青木ヶ原溶岩です。そして剣丸尾第一・第二と続き、檜丸尾、鷹丸尾と、山中湖まで続いていくことがこの図からわかります。

まず大隅先生からお話がありました。貞観6年の噴火では、最初に駿河国から富士山が噴火したよという報告があったのです。詳細は省きますが、甲斐国ではその二ヵ月後くらいに現地調査をしてから中央政府に報告をしたようなのです。ここで私が注目したいのは、八代郡本栖ならびに割の両海を溶岩が埋めて、水が熱くなるとともに魚や亀が死んで、百姓の居宅が海とともに埋まってしまった、あるいは家があっても人はいない、という部分です。つまり、この記述に従えば、溶岩が流れてきた下には住民の居宅、当時の平安時代の村があつてその村がみんな埋まってしまったこととなります。その村が掘り起こされていろいろな出土品があれば、年代観もまたはつきりわかります。でも厚い溶岩の堆積は、3メートルから10数メートルにもなりましようか、いちばん深いところでは130メートルと言われています。そんな溶岩の下までとても発掘調査はできませんので、工事などの偶然の機会をみながらデータを集めているというのが現在の状況であります。

## 2 溶岩と考古資料

資料にあります湖周辺の村が溶岩にのみ込まれてしまったというのはこのあたり、つまり割の海として精進湖と西湖が繋がっていた大きな湖の岸边と思われるあたりです。ではどんな村があつたのか、ということが問題になってまいります。

現在の河口浅間神社の裏のちょっと高いところから西側の写真を撮ってみたものですが、先ほどもお話し申し上げましたとおり、長尾山や氷穴などの火口列が続きます。そして奥には大室山が見え、手前には河口湖が広がっています。ここで突如西暦864年にどかあ〜んと噴火して、溶岩が流れてきたわけです。その結果、村がかなり埋まるということになったのです。噴火の場所については、この写真はちょうど近野路こんのうじのところでした、若彦路とも言われます。精進口登山道がこの付近を通っておりそれと交差する付近、そこが天神峠でありまして、こうした馬頭観音が立っていることで古い街道であつたことがわかります。このあたりを歩きますと、こういった写真のような火口列が続

き、こんなにでっかいスコリアがゴロゴロしていて、噴火の激しさがわかる、そういうふうな場所であります。

そして、本栖湖と剗の海についてであります、この二つの湖があったところに溶岩が流れ込みだんだん埋まっていき、現在はこんな形になって、精進湖と西湖に分かれています。これがかつての富士山科学研究所で刊行した『富士火山』に載っている図です。この黄色いところが青木ヶ原溶岩ですが、馬場先生はちょっと一部ここが疑問だよという話でございました。たしかにそういうこともあろうかと思えます。いずれにしてもこの溶岩に覆われているこのあたりに本来は湖があつて、おそらくその湖畔を中心に平安時代の村があつたのでしょう。それが溶岩によって埋まってしまった。後からお話しますが黄色い丸、緑の丸をつけてありますが、これは実際土器が発見されている場所です。黄色が平安時代、緑が古墳時代です。このあたりは溶岩の真下ではありませんがその縁辺かもしれません。一方鳴沢村のかつての溶岩石切場のところからも土器が発見されています。以下では、その話を進めてまいります。

鳴沢村ジラゴンノの石切場ですね。馬場先生が溶岩のサンプルを採られたのもここですよね。今でも道の駅「なるさわ」の富士山側に続いていて、田中収先生による解説板がありますので、現地のみなさんはよくご承知だと思います。

さて山梨県の考古学の草分けに、山本寿々雄先生がいらっしゃいます。この方が『日本の古代遺跡』山梨県（保育社）というシリーズで鳴沢村の石切場下から発見された土器片を、「溶岩流直下から出土した土器破片」という形で紹介しています。これは考古学でいう「甲斐型土器」の甕ということになります。

「甲斐型土器」とはどういうものかと申しますと、奈良時代から平安時代を通して200年もの長い間作り続けられた土器です。甲府市の横根や桜井一帯では一英和大学の近くですが、ものすごく良質な粘土が採れます。大坪遺跡としてよく知られています。あのあたりからは古代の土器を焼いたり、甲斐国分寺や寺本廃寺の瓦を焼いたりした遺跡が発見されており、つい最近まで瓦屋さんが続いていたというふうに良い粘土が採れたんです。これは平川南先生を始めとして多くの研究者がおっしゃっていることなんです。奈良・平安時代には、甲斐国直営の土器を作る工場がそこにあつたとのことなんです。

たしかに非常に優れた土器で、お碗やお皿、ものを煮炊きする甕がいっぱい発見されております。非常に良い土器で、お隣の信濃ですとか、武蔵・相模・駿河、果ては奈良の平城京からも出土している。その土器について多くの研究者が何年も研究を続けて、土器の細かい形や作り方の年代差を整理し、奈良時代から平安時代の終わりまでの移り変わりをつかんだのです。つまり土器の形から年代を想定する「物差し」が作られたのです。土器の形を見れば、奈良・平安時代のどのあたりにくるかという、編年といいますが、そういった物差しができています。

これに当てはめていきますと、鳴沢村の溶岩下から見つかった土器は「甲斐型土器」に間違いなく、煮炊きをする甕型土器、その口の部分と底の部分の破片であることがわかります。これが溶岩の直下から出土しているわけです。ということは、溶岩が流れた年代は、この土器よりも古いわけではない。人びとが使っていた土器が溶岩で埋まってしまったわけですから、溶岩流の方が新しい、あるいは同じ時代ということになります。

それでは、この土器についてふれます。現物を手に取って調べればもっと良くわかるのですが、実はこの土器、いまだどこにあるのか調べているのですが、よくわからないのです。この写真が頼りです。大事なのは、この側面の厚さです。お手許の資料にも、9から10世紀の土器の図面を掲げておきました。微妙なところですが、右は9世紀の後半といわれている土器、左は10世紀になってからのものとされています。これは考古学上の年代観でして、研究の進展の中でずれてくる可能性もありますが、現在の考え方では右の土器が出てくれば9世紀代の後半、つまり850・860年から890年くらいまでのものだろうと。ところが左は10世紀ですから、900年代に入ってからだとそれぞれ考えられています。何が違うかといえますと、図面を比べてみてください。この口の部分に注目してください。こちらの9世紀のものは、口の部分がちょっと反っていて薄くなっています。ところが10世紀の初めといわれているものは、口がかなり厚くなっている。こういうものが発見されれば、10世紀代だとおおまかに言えるのです。ではこの写真の土器はどちらだということになるのですが、これは正面だからわかりにくい。実物があれば横から見てふくれているか、すんなりしているかわかるのです。ただ感覚としてここが厚くなっているの、これをそのまま平安時代の土器の研究をしている人

が現在の視点で見れば、「10世紀の初めだよ」と言われかねない。9世紀のものと考えるのは、ちょっとむずかしくなってくる。

そうしますと、今では青木ヶ原の溶岩は864～866年、つまり9世紀の半ばとされていますよね。土器の編年にあてはめるとそれよりもちょっと新しくなってきましたので、溶岩の年代を新しく考えざるをえないのかなということになります。

もうひとつ、考古学による年代の確立です。先ほど馬場先生の話にありましたC14もひとつの方法です。それから、平安時代の住居を発掘すると「甲斐型土器」と一緒に隣の駿河国や相模国の土器、さらには瀬戸・美濃方面で焼かれている陶器が出土することがあります。年代決定に一番有効なのが、瀬戸や美濃の陶器—焼き物—なんです。先ほど窯の話が出ました。瀬戸や美濃方面ではその窯ごとに年代をつかんでいますから、これらは非常に確度が高い。その陶器の年代から導き出された年代です。

石切場の土器につきましてはまだまだ不安なところがあり、これは今では10世紀代のもと言われているけれども、研究の進展具合では、30年くらいさかのぼって考えて良いということになれば、9世紀の後半に位置づけられる可能性が出てまいります。

以上のような研究状況でありますので、まず考古学の年代の再チェック、それから二つめには溶岩流のチェックと、こうしたふたつの作業が今後とも必要だと思っているわけです。

だいぶ時間が過ぎてまいりました。ここで本栖湖沿岸の遺跡に目を移します。先ほど申し上げましたように、黄色いマークが平安時代、緑が古墳時代の遺物の採集地です。本栖湖では湖の中から土器が見つかったり、岸からも発見されています。緑色がいっぱいあります。富士ヶ嶺、朝霧高原の方から精進湖を通って緑色の点が続きます。後に中道往還という道が発達しますが、古墳時代のメインのルートがこのあたりにあったのではないかという、ひとつの証拠にはなりません。今日はその話ではなくて、湖の話です。湖底の遺跡です。ここに掲げた写真や図は旧上九一色村の教育委員会が、潜って調査をした結果です。渚といいますかちょうど湖畔の汀線から水の中、岸から7メートルから60メートルくらい離れた水深10メートル前後のところに土器がたくさん沈んでいるのです。県営駐車場がちょうどこのあたりで、「もぐらん」という遊覧船が停泊して

いるのがこの辺ですが、それよりちょっと南側です。この写真は報告書から転載しましたが、このような形で湖の底に土器が沈んでいます。この土器を教育委員会が調査しまして報告書を出したのですが、すべて4世紀の中頃から5世紀のもの、つまり古墳時代のものなのです。湖底の土砂に埋まっているというのではなく潜りさえすれば見つけれ、そんな不思議な状況です。湖とか水中というのはお祈りのために土器を投げ込むといった事例もありますので、中道往還のようなメインのルートが通っていることから、私も最初はそれかなと思ったんです。ところがです。報告された土器を見ると、お祈り用の神棚に上げるような土器もありますが、こうした煮炊きに使うような日常の道具の方が多い。日常の道具がいっぱい出てくるということは、これは村があってそれが水没したのかなと、こう考えたわけです。じゃあ、何で水没したのだろうか。湖が狭くなったのではないかと、とも言われております。この写真はボートに乗って東海大学の根本先生を中心に、カメラを引っ張って調査をしているところですが、実際に浜を歩きますとこの写真のように土器の破片を拾うことができます。これは私が採集したもので、平安時代の土器もありますが古墳時代のものが多い。こうしたものが湖畔に落ちているわけです。

それから、少し離れたところに湖水遺跡という遺跡があります。水の中ではなくて岸辺にある遺跡です。ここはたまたま萩原委員長さんが、まだ若い頃分布調査をやったそう、そのとき浜を歩いたらゴミ穴が掘られていた。そこでその穴に潜ってみると、地表から40センチほどの厚さで溶岩がある。その下に10センチの黒い火山灰があって、そこに150点ほどこういう土器の破片が落ちていて、その下はまた溶岩であったということです。下の溶岩があって、黒い土があって、上にまた溶岩があるという、その溶岩と溶岩の間からこの古墳時代の土器がいっぱい出土しているということです。

その隣の地点を歩いてみますと、上野原遺跡というものがあります。ここも同じように溶岩が厚さ1.5メートルほどありその下から土器が発見され、またその下に溶岩が広がるという状況です。ここの土器は全部平安時代のもので、写真のこれは先ほど紹介した唇のふくらんでいる甕であることから、10世紀のものと考えられる。こちらのお碗は10世紀、このあたりの遺物は9世紀です。9世紀から10世紀くらいの土器がやはり

溶岩の下から出土しているということで、これは鳴沢村と同じような状況であります。

さて、5分前というサインができました。以上を整理しますとこういえることが言えます。鳴沢村のジラゴンノあたりで出土した土器は、やはり9世紀後半から10世紀初頭のもので、本栖湖底では4～5世紀、つまり古墳時代前期。本栖湖畔の湖水遺跡が古墳時代前期。隣の上野原遺跡は、9世紀から10世紀。こういう結果が土器からは言えるのです。

これらから推測しますと、①鳴沢村のジラゴンノ付近の土器は貞観6年～8年の溶岩の可能性もあるけれども、10世紀となった場合には、溶岩の流れた時代や土器の年代についてさらに検討が必要ではないかと思われるわけです。今後の課題かな、と思います。それから、②の本栖湖底遺跡、③本栖湖畔の湖水遺跡で見つかっているのは古墳時代前期の土器ですから、その直上にある溶岩というのは5世紀頃に流れた可能性もある。また8世紀や9世紀に流れたとしても、古墳時代の土器が下から出土するということはおおしくありません。つまり本栖湖の東の岸には、本栖溶岩という縄文時代に流れた溶岩の上に5世紀、9世紀、10世紀代に溶岩が流れた可能性も考えなければならない、というところがございます。

### 3 考古学から探る噴火

そのほか、簡単に富士北麓の遺跡をご紹介します。北麓では、溶岩や火山灰の下からいっぱい遺跡が発見されております。まず、富士吉田市小明見の上中丸遺跡です。檜丸尾第一溶岩と呼ばれる溶岩の3メートルも下から、縄文時代中期—4,500年前—の遺跡が見つかりました。

同じく富士吉田の上暮地遺跡。これは御坂山地の麓ですね。富士急行線がここを通っています。ここまで溶岩が流れたのではなく、火山灰がたいへん降ったようです。富士吉田市教育委員会の篠原さんが調査していますが、こういう穴がいっぱい発見されました。これはどうも木が立っていたところに熱い溶岩が降ってきて、焼けた跡ではないかと言われております。

次の写真は河口湖畔でみられる船津溶岩（富士河口湖町船津）です。東京オリンピッ

クが開かれたときー1964年ですねー、ホテル建設の際に溶岩の下から5,000年から6,000年前の土器が発見されています。それから、富士御室浅間神社（富士河口湖町勝山）とかその周辺からも土器が発見されています。

こちらは剣丸尾第一溶岩です。世界遺産センターを造っているときの写真です（富士河口湖町船津）。このときには土器は出土しませんでした。この下流の方に先ほど馬場先生がお話になりました富士吉田市西丸尾遺跡があります。この溶岩の下から発見された土器を見ますと、ちょっと唇が厚いものですから現状の年代観に照らしますと10世紀代で、こちらの方は9世紀代となります。従いまして9世紀、10世紀代の両方があるということになります。こういうふうに土器と溶岩の研究を続けてまいりますと、さらにいろいろなことがわかってくるのではないかと思います。

これは鷹丸尾溶岩です。この溶岩の下からは12世紀代、つまり平安時代の終わりから鎌倉時代にかけての鏡が発見されています。そうしますとこの鷹丸尾溶岩につきましては西暦800年から802年の噴出と言われていたのですが、都留文科大学名誉教授の上杉陽先生はむしろ新しい時代のものではないかと、こうした遺物の存在に基づいて発言されています。こちらはまだまだ問題があると言えます。

次は忍野村の<sup>ささみはら</sup>笹見原遺跡から発見されました「水神」墨書土器です。これは9世紀中頃のものでして、ちょうど貞観の噴火の頃の土器だと言えます。

以上で終わります。ここから先は、長時間ヴァージョンですので、また機会があればお話いたしたいと存じます。ちょっと長くなってしまいました。この辺で終わらせていただきます。